



TITLE:

太[平]洋地域の探検と開発(上)

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

CITATION:

小川, [琢]治. 太[平]洋地域の探検と開発(上). 地球 1926, 6(1): 1-8

ISSUE DATE:

1926-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183131>

RIGHT:

地球

第六卷第壹號

大正十五年七月一日

太平洋地域の探検と開發 (上)

小川 琢 治

来る十一月の交には汎太平洋會議が日本で開かれ歐米學者を迎へる豫定であるから、本誌はその記念の爲めに茲にオケアノス(大瀛海)を表徴する圖案を以て表紙を飾つた。本卷には太平洋地域に關する事項を輯めて見る積であるから、茲にその端緒として東西兩洋の國民にこの海洋面が如何に知られて來たかを略述することにした。

洋海の濱に立つて浩蕩として際涯の見ぬ水面を望むものに彼岸ありと知る由はない。希臘の理學者が我々の生を寄する陸洲の外邊に大瀛海 Oceanos が環るが如く感じたのは文化の範圍が局限された上古に在つて固より怪むに足らぬ所である。

希臘地理學の天頂に達したアレキサンドリアのユラトステネス(西曆紀元前第二世紀初)からプトレメウス即ちトレミー Ptolemy(後第二世紀)に至る四百年間に羅馬帝國の交通の門戸たるこの港に集散する航海者の報導を蒐收して大成したトレミーの世界圖に降つても尙ほ海陸相互の關係が判然たらぬのみならず、歐弗兩洲の西を限る大西洋の彼岸が何處で果てるか、陸上の交通の極東端たる

「生絲國都」Sera Metropolis から東何處に到つて陸地が盡きるかを示し能はなんだ。

東洋に於ても上古の印度人は世界を南瞻部洲その他の五大洲と考へ、その觀念が戰國時代の支那に傳はつて鄒衍の如く禹貢九州の外に大九州があつて海が之を環ぐるこの考を起したらしく、何れも海洋に對しては極めて漠然たる見解を有し、四海の中直接に支那の東南邊を界する東海と南海を除いては、北海といひ西海といひ北亞中亞の交通が廣がるに従ひその位置が遠くなるに止つたのである。此の時代にその東海即ち太平洋に關して行はれた傳説として面白いのは扶桑即ち博桑の神話である。是は六朝時代に降つて或は之を日本に當てんとし、近頃に至つてカリフォルニア州の巨象木 Mammoth trees の樹林が知れても之を扶桑に擬せんとすることは危險極まる想像で、此の如き遠い對岸の様子が傳はつて來る徑路を辿ることは頗る六ヶしい。

プトレメウスよりも前に出來た紅海水道記 Periplus of the Erythraean Sea は近頃ショッフ氏の精譯によつて地名物産の詳密なる考證を得たが、此の書の第六十四節に前節の末に黄金島 Chryse (今のマラッカの半嶋)に最良の玳瑁が産すとの記事に續いて「此の地方の北方に次いで外海はティス This といふ國に終り、其處にティネ Thina といふ大きな陸内の都會があつて、其處から生繭生絲絹布が徒歩でバクトリアを経てバリガザへ運ばれ、又たガンデス河に沿ひダミリカへも輸出される。然かしティス國は近より易からぬ。其處からは殆んど人が來ない」と記載するに止まる。

プトレメウスの印度洋を經る東方への海上交通に關する智識もまた曖昧で、馬來半嶋から陸地が西南に廻はつて印度洋を取り圍み、水面よりも大きな陸地が南方に廣がつてゐるかの如き誤解を千

數百年の後まで傳へたが、而かも後漢書桓帝紀の延熹八年（一六六年）九月に「大秦國遣使奉獻」といふ記事が見え、西域傳にも「至桓帝延熹九年、大秦王安敦遣使、自日南徼外、獻象牙犀角玳瑁、始乃一通焉、其所表貢、並無珍異、疑傳者過焉」といひ、その使者が羅馬人でなくてアラビアか波斯かの商人であつたとしても、今の新嘉坡を經る南海の交通が既に行はれてゐたと想像され得るのである。従つてブトレメウスのカッチガラ Catigara なる港の位置に關して支那か印度支那かの疑義はあつても、之を支那海の沿岸に求むべきは勿論である。

漢書地理志の南海郡（今の廣東）に「揭陽（注、莽日南海亭、韋昭曰揭音其逝反、師古曰音竭）」といふ縣名があつて、その位置が潮州に當る。この掲の音が最もカッチに近く、南海郡は早く開け南越王尉佗が漢初に割據した處で、同志に「處近海、多犀象毒冒珠璣銀銅果布之湊、中國往商賈者、多取富焉」といふ地方である。

故に支那の交通は古くから行はれて印度洋への航路は漢代に既に開けてゐたと考へられ、アレキサンドリアとの直接の往復がなかつた爲めに正確なる位置の關係が希臘羅馬の地理家に知れなだに過ぎぬ。

南海に關する支那側の智識は魏晉以後正史に見ゆる所が漸く多くなるが、その航海記事に至つては東晉沙門釋法顯自記遊天竺事と附題した高僧傳（一切經廣字函）で弘始二年己亥（今の年表弘治元年を己亥に當つ、西曆三九九年）當時符秦の首府長安を發し、燉煌からバミルを越えて印度に入り、東晉義熙十年甲寅に南海を經て山東に還つた記事である。

法顯は歸途恒河口から商人の大舶に便乗して師子國（錫崙嶋）に渡り、二百餘人を載せる大舶で此處を發し、暴風に値ひ耶婆提國に到り、是より廣州に赴かんとして又た風波に阻まれて終に青州牢山（青島附近）に歸着したのである。此の如く漂流を續けた難航海であつた爲め、その中間に寄つた耶婆提國が何嶋なるか不明で、ビール氏の譯本（英譯西域記叙錄）には之を瓜哇に擬したが、音からいへば耶馬臺に當り日本のことである。但し法顯が土語を聞き當時耳に慣れた耶馬臺と混同したと考ふればそれまでである。

この他唐初高宗の咸亨二年（六七二）義淨三藏の渡天の旅も往路南海を經、その行程は同年十一月廣州から占波即ち古臨邑、跋南即ち古扶南を經て印度に往いたのである。然れどもその記載は儀軌の研究を主眼として地理を無視し、十五日を經て咸亨四年二月八日恒河口の耽摩立底國（法顯の多摩梨帝國）*Tamralipta* に達したと云ふに止る。

此等の求法僧の齎らした智識は甚だ貧弱であるが、當時の交通状態の一斑を窺ひ得、我が遣隋唐使舶の往復が常に風波の爲めに阻礙を被つたのと軒輊する所がなかつたことは明かである。

中世に入りマホメットが出て回教の世界的帝國が興りアラビア人が歐亞弗の三大洲に跨つて貿易し得るに及び、希臘地理家以後數百年間衰頹した斯學が再び振興して、唐代に回教徒の廣東に興した寺院のミナレットは當時大食の貿易した行程の一里塚となつて今尙残つてゐる。又たアラビア地理家の著書では第十世紀末のマスードの「黄金の牧場と寶石の鑛山」が當代の地理的智識の範圍を包括するものであつた。この地理家の姓名はアラビア流に呼べばアリ・エルマスードの子のエル

フセインの子のアブル・ハサン・アリといひ第三ヘザラの末葉にバグダートに生れ、回曆三百年（西曆九一二年）から世界を周歴して九五五年に舊カイロー（フテスタート）で書き了つたといふ。（亞拉伯佛蘭西對照一八六一年巴里版バルビエ、バブエ兩氏譯本 Magoudi: les prairies d'or がその良本である）。

著者の自ら言ふ所に従へば、自身にあらゆる國に珍らしいことを識り、各國の特異なる點を自ら目撃研究せんと渴望してその爲めにシンド（印度）ザングバル、シンフ（交趾支那の南）、支那、ザベデ（瓜哇）に往つた。東から西へホラサンの果てからアルメニア、アデルバイジャン、エラン、ペイラカンに走り、順々にイラック、シリアを探つたといふことである。その支那に關する記事（第五章）の如きは中世旅行家の多くの如く捏造誇張の甚しきを認めるが、寶貨を輸出して外國に贈り外國からも珍異の物資を輸入して國の繁榮の基が出来たといふのは唐代に至つて支那が曠古の盛大を極め四裔から朝貢した狀況を叙したものと想はれ、その海岸から三月程の奥地の帝都アンムン（Amoy）は多分長安を指すらしい。その回曆二六四年（八八六年）から起つたとしたヤンシュの戦亂は唐僖宗乾符年間に起つた黃巢の亂を指し、ティギリスに劣らぬ一大河に臨んだ重要都市としたハンク（Hankou）は廣州（廣東）であるらしく、此の河はハンクから六七日程にして支那海に入り、バスラ、シラフ、オマン、印度の諸市、ザベデ嶋、シンフその他の諸國からの船舶が此處に集り、貨物が輻湊し、黃巢が之を陥れた時に住民は回教徒基督教徒猶太人、支那人より成り、虐殺された外國人二十萬を數へたといふ。此の二六四年からしたのは此の頃に盪平されたのを誤り記したらしい。

兎に角アラビア地理家の目睹した支那南海の盛況は乾符六年に上奏した左僕射于琮の「廣州市舶實貨所聚、豈可令賊得之」との言に符合し、この繁榮は秦漢の間に既に一都會と認められて番禺即ち黃禺と呼ばれた頃から繼續發達した印度方面の貿易の結果で、中世の航海貿易の利益を壟斷したアラビアに此の如き記載の殘つたのは決して偶然でない。

次に歐亞に跨つた一大世界的帝國として勃興した蒙古民族の盛時は伊太利諸市が地中海の貿易を獨占した時代で、ボロ一家が中亞を経て和林を訪ひ、マルコ・ボロが異民族異教徒を包含驅使するを意とせざる忽必烈汗の朝廷に寵用されて、南海から歐洲に還り、第十三世紀の世界を殆んど一周するの機會が生じた。此の頃は十字軍が續きサラセン國が西亞北非に據つて歐洲人の南海交通の途を閉塞してゐた時であつて、偶然蒙古の征服によつて東亞の盛況が利益に鋭敏なる歐洲人に傳はつたのである。

ニコロ・ボロとマツフエオ・ボロとの一二六〇年の旅行は羅馬法王の蒙古と聯絡を取つて回教國に當らんとする希望に出で、九年の後還つて、長兄マルコの子で十五歳の少年なる同名のマルコ・ボロを伴つて第二回の旅行を試みたのである。第一回は黑海を横リラルガ河上流のボルガラに往き、東南ボカラを経てサマルカンドに往き、更に東北和林に達した。第二回には一二七一年シリア海岸のアクレに寄り、ラヤスから上陸してアルメニアを廻つて東南波斯海に出でホルムズからイラン高原を横り東に向ひ、バミルを越えてタリム凹地に下り、和闐燉煌肅州を経て寧夏に出で、黃河に順ひ歸化城から東に（張家口）に廻つて燕京に達した。此後に忽必烈に用ゐられて四川に往復し、公主の東

道となつて楊州からカイヂュ(瓜洲)を渡つて鎮江に出で、杭州を経てザイトン泉州から上船した。その往復二十数年の大部分は支那に生活し元主の朝廷に在つたのであるから、從來西洋人の何人よりも東亞の國土人情風俗に精通したのはいふまでもなく、その一二九二年出發して歸路に就くや日本、チャンバ、シャム、瓜哇、ニコバル、スマトラ等の諸島の情報を集め、印度ではマラバル、錫崙等を見舞ひ、ホルムズで上陸し、公主と婚約ありし首長の死んだのでその弟に妻はせて、トラペズンド、コンスタンチノブルを経て一二九五六年頃に郷里ブエニスに歸つた。

此の大旅行家の傳へた話は逆も當時の掌大の半島に住む伊太利人の間にその儘眞實とし受け取られる筈なく Il Milione 百萬マルコと渾名を取つたといふ位であるが、然れども同時代の有識の人士に傾聴されたのは勿論で、臨終の時に友人が何かその旅行記中の事實以上の取り除ける部分がないかと問はれて、否な實際賭た半分も書いてはないと答へたといふ。

ユール、コルデイエ兩碩學の精細な研究によつて今我々の手にし得る *The Book of Ser Marco Polo, the Venetian concerning the Kingdoms and Marvels of the East*. Transl. and Edit. by Sir H. Yule, revisid by H. Cordier. London, 1903. 二卷は實に蝸牛角上に閱きつゝあつた歐洲諸國をして眸を海上に轉じて富源を海外に索めんとする氣風を喚起した大文字である。リヒトホッフエンが地理的探檢の動機の第一に黄金を擧げたが、マルコ、ポロの喚起した注意の最大は前に擧げた希羅人の夢想した黄金嶋 Chryse よりも遙かに遠い東に前代未聞の黄金嶋があることである。その記載した日本國ジバング Zipangu (ポロの書にチバング Chipangu と綴る)の章に曰く、

チバングは大陸から千五百哩を隔てた東方海上に在る一嶋で又たそれが頗る大きな嶋である。國人は白晳で文化開け且つ厚く恵まれてゐる。彼等は偶像崇拜者であるが、何れにも屬しない（獨立國である）。且つ私は彼等の有する黄金の無量なることを汝に語り得る。といふは黄金がこの嶋に出て（而かも國王はその輸出を許さぬからである）。又た大陸から此の如く遠いので商人の往來するものが殆んどなく、従つて彼等の有する黄金が途方もなく豊富となつてゐる譯である。

私は汝にその嶋の君の宮殿について駭くべき事を語らんに、同國は大きな宮殿を有し、それが恰かも我々の寺院の屋根が鉛で葺かれてゐる如くに、全く純金で葺かれてゐて、その價を見積ることが殆んど出来ぬ位であることを語らねばならぬ。加之ならず宮殿の敷石も房室の床板もすべて黄金で出来てゐる石の板石の如くその厚さは二指許もあり、窓も亦た黄金で出来てゐる。

この記事は西洋人に半信半疑を以て誇張の言として聽かれた筈で我々日本人でも先づ呆れるが、然かしこの黄金の傳説が起つた理由を考ふれば桃山時代の金臺雲に聳ね日に耀やいた盛觀は大阪伏見から發掘した金箔を塗つた緑釉の瓦から想像され、更に室町時代の斯波氏の邸址から出た同じ緑瓦を看、金閣寺を看、更に平安朝に陸奥藤原氏の建てた金色堂のあることに想到すれば訛傳の誇張されて忽必烈汗に我が群嶋の征略を企てさせた動機の一部を成したと考へしめるに足るのである。